

海外情報

北米の酪農家とワールド・デイリー・エキスポ2025の見学報告

熊本種雄牛センター 山田 彩美
岡山種雄牛センター 境 悠里
総務部 技術・情報室 倉上 愛梨

令和7年9月29日～10月5日、World Wide Sires社主催の「北米の酪農家とワールド・デイリー・エキスポ2025の見学ツアー」に参加し、北米の酪農情勢と世界有数の酪農イベントに触れる貴重な経験を得ることができました。今回のツアーは、世界各国から畜産関係者が参加しており、全体で約350名にもなる大規模なもので、日本人参加者は株式会社野澤組から3名、当団から私たち3名の合計6名でした。

滞在地であったウィスコンシン州は、全米トップクラスの酪農州として知られており、移動の車中からも、至る所で大きな牛舎と広大な牧草地の光景を見ることができました。

酪農家訪問

(1) Larson Acres (ラーソン・エーカーズ)

【概要】

飼養頭数：2,800頭 農地面積：5,500エーカー
日平均乳量：約47kg、乳脂肪率：4.7%、乳蛋白率：3.4%
飼養形態：フリーストール（パラレルパーラー 2台）

ウィスコンシン州マダノリアに位置し、ゼネラルマネージャーのサンディ・ラーソン氏を中心にラーソン家3世代で経営している牧場。約100年前に飼養頭数6頭・農地面積80エーカーの規模からスタートし、1957年に現在の場所に移転したそうです。

雌牛全頭のゲノミック評価を行っており、牛群の成績上位1%はドナー牛として採卵、その他の上位牛には性選別精液を授精、下位の牛にはアンガス牛の精液を授精し、「Beef on Dairy」と呼ばれるいわゆるF1を生産しています。牛群の収益性を最大化するため、



明るく衛生的な牛舎

Zoetis社が提供する疾病抵抗性指数「DWP\$」の高い種雄牛の精液を利用しているとのことでした。

また、牛舎内の環境整備にも力を入れているようで、壁一面のファンにより風通しが良く、砂が十分に敷かれた牛床で牛がリラックスして寝そべっており、牛体が綺麗で臭気がほとんどしないなど、牛にとって過ごしやすく、非常に衛生的な環境であると感じました。

(2) Endres Berryridge Farms (ベリーリッジ・ファーム)

【概要】

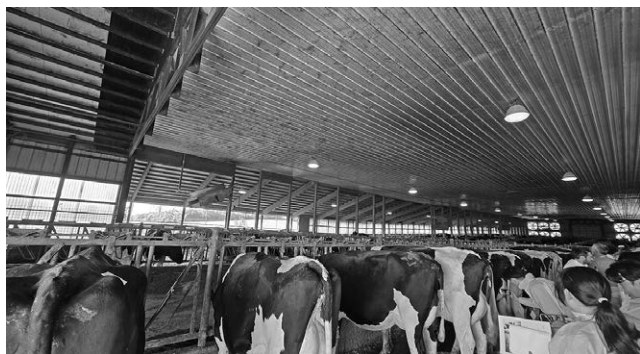
飼養頭数：750頭 農地面積：1,500エーカー
飼養形態：フリーストール

ウィスコンシン州ワウナキーに位置し、1915年の設立から110年にわたりエンドレス家が経営している牧場。現在は、4代目のジェフ氏、ステイブ氏、ランディ氏が引き継いでいるそうです。

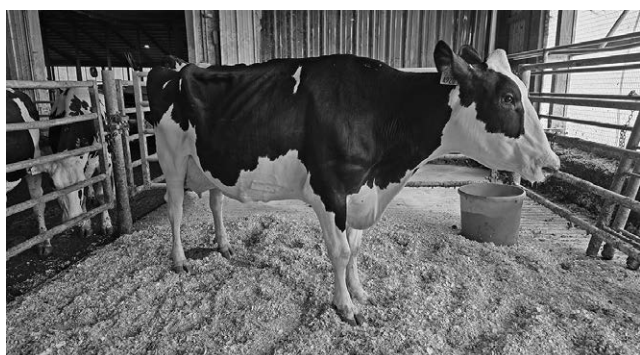
牛群管理においてゲノミックに重点を置いており、本牧場の牛群は米国ホルスタイン協会から「Progressive Genetics」として17年間認定されています。乳成分・乳器・乳用強健性をバランスよく改良しているとのこと。子牛のうちに病気にさせないことがのちの収益に

つながると考えており、こちらでも「DWP\$」の高い種雄牛の精液を利用しているそうです。

また、高能力な雌牛からの種雄牛造成も行っており、現在のトップは「HORSENS SSI-BR GMDY 4920-ET」。これまでに、「KARL (7H16735)」・「FRYSKY (250H16839)」・「AKSHAY-P (250H17075)」の種雄牛3頭を輩出しています。



牛舎内の様子



HORSENS SSI-BR GMDY 4920-ET

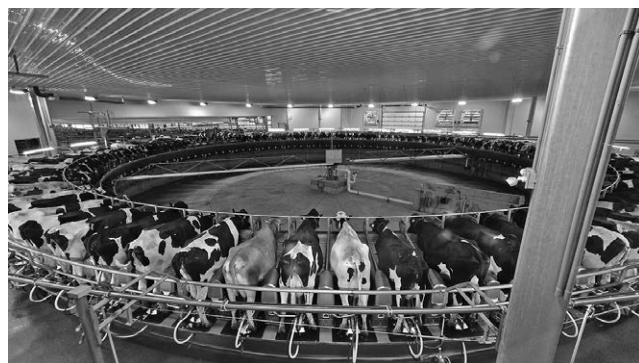
(3) Siemers Holsteins (シーマーズ・ホルスタイン)

【概要】

飼養頭数：8,000頭 農地面積：7,500エーカー
日平均乳量：45kg、乳脂肪率：4.4%、乳蛋白率：3.3%
飼養形態：フリーストール（ロータリーパーラー 1 台、パラレルパーラー 2 台）

ウィスコンシン州ニュートンに位置し、シーマーズ家の5代目ダン氏と6代目ジョーダン氏が中心となって経営している牧場。1971年に飼養頭数200頭規模からスタートし、拡大していったそうです。

搾乳重視で乳量・長命性・疾病抵抗性・体型をバラ



圧巻のロータリーパーラー

ンスよく改良しており、TPI・HHP\$・機能性が高い種雄牛の精液を利用しているとのこと。未経産牛の一部のみゲノミック評価を行っており、ドナー牛として利用しています。生まれる子牛の半数はIVF産子で、そのほとんどが自家生産の受精卵のため、全飼養頭数の約95%は自家産の牛だそうです。ショウにも参加しており、今回のワールド・デイリー・エキスポにも出品されていましたが、以前ほど積極的ではないようでした。

1年半前に、約80億円（現在のドル円相場）の建設費をかけて新牛舎を設立。110頭のロータリーパーラーを導入しました。経営面を考慮して、同時にバイオマスプラントを建設し、堆肥の再利用と売電によって採算を取っているとのことでした。新牛舎設立後からは、牛床を砂ではなく戻し堆肥に石灰を混ぜたものに変更したそうです。

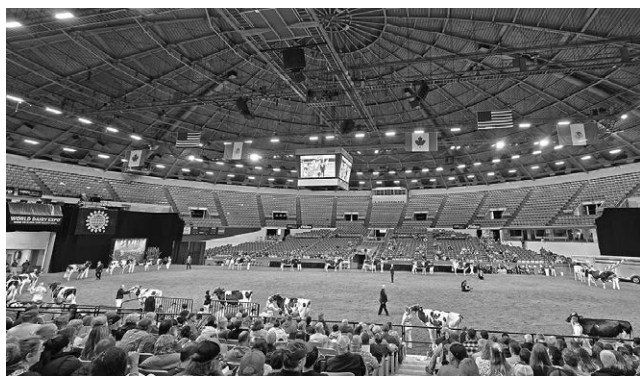
また、頭数が多いため、システムを活用して牛群管理を行っており、未経産牛には「cow manager」を、経産牛には「SCR」を使用しているとのこと。「SCR」はパーラーと連動させているようで、搾乳後に削蹄や授精の対象牛を自動ゲートで振り分けできるようになっており、訪問した際もその様子を見ることができました。

World Dairy Expo 2025

会期：令和7年9月30日～10月3日

会場：Alliant Energy Center

ワールド・デイリー・エキスポは、1967年から開催されている、毎年世界中から約5万5千人が集まるワールドクラスの酪農イベントです。北米最高レベルの乳牛のショウが行われており、2024年大会には、米国39州とカナダ4州から1,812人の酪農家が2,527頭の牛を出展したとのこと。ショウのほかには、酪農資材・機械や牛の健康・治療用品、飼料等を販売する企業が

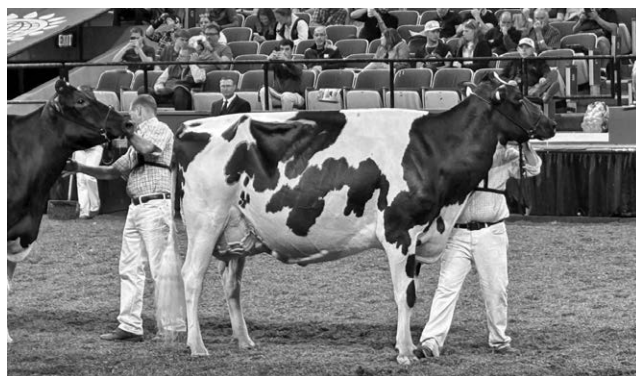


ショウ会場の様子

ブースを出展する見本市や、乳牛のセリが開催されていました。また、ショウの待機牛舎は一般客も出入り自由であるため、単なる牛舎ではなく、装飾や看板など出品者がそれぞれ自分たちの牧場をアピールする場となっていました。

見学初日の10月2日には、レッドアンドホワイト（R&W）、ミルキングショートホーン、未經産クラスのブラックアンドホワイト（B&W）のショウが開催。全286頭が出場したB&Wの未經産クラスでは、部によっては会場に収まりきれないほどの頭数の出品があり、さすがの審査員も少し迷っているような様子が見られました。その中で、ジュニアチャンピオンには、Echo Glen Master Ivy（父：マスター）が選ばれました。

見学2日目の10月3日には、経産クラスのB&Wショウが開催。全278頭の出場がありましたが、どの牛も堂々としており、序列をつけるのが困難なほど目を引く素晴らしいものばかりでした。その中で、グランドチャンピオンには、5歳クラスで1席を獲得したLovhill Sidekick Kandy Cane（父：サイドキック）が選ばれました。そして、ワールド・デイリー・エクスポ2025を締めくくる、品種を超えた大会全体のチャンピオンを決めるシュープリームチャンピオン戦。栄えあるチャンピオンに輝いたのは、R&Wショウにてグ



B&Wグランドチャンピオン

ランドチャンピオンとなったGolden-Oaks Temptres-Red-ET（父：アンストッパブル）でした。

最後に

今回のツアーを通じて、北米における酪農経営の実態や改良方針、共進会への取り組み方など、日本と異なる点も同様である点も沢山見つけることができ、それらから多くの学びを得ることができました。また、ツアー参加者が集まるパーティーや主催者とのディナーといったより気軽に会話を楽しめる場も設けられており、沢山の方々と交流することができました。体験する全てのことが新鮮に感じられ、あっという間に過ぎていった7日間は、私たちにとって今後の業務の活力となることはもちろん、人生の財産となる非常に貴重な時間でした。

最後になりますが、今回のツアーを企画されたWorld Wide Sires社の皆さま、そして期間中大変お世話になった株式会社野澤組の皆さまに、当誌面を借りて心より御礼申し上げます。



B&Wチャンピオンたち



最後の夜に